

## 「ホーソン・ジェイムズ・エリオット」(上・下)

鈴木敦巳・日夏 隆

### (下) はじめに

(上)で私はエリオットの描く罪人(ハリー)の精神的苦悩の状況がホーソンの描くそれと非常な親近性を有するものであることを示したつもりであるが、墮罪とその結果としての苦悩の過程を経て罪人が達する次の段階、即ち最後の「救い」という段階に至る時、エリオットとホーソンの間には親近性よりは相違の方が重要になってくる。この相違が先の親近性と密接に関連してのそれであること、またこの相違に注目することによって両作家の(殊にホーソンの方の)ある面での特質をより明確につかむことが出来ること、この二つの理由から以下私はこの問題のアウトラインを描いてみたい。

### 第一章 「救い」の概念の相違

エリオットとホーソンの「救い」の概念の相違を考える前にその前提として、先ず人間及び世界の「墮ちた状態」の認識の仕方の相違ということから始める必要がある。既にみたように『一族再会』のハリーは自分が墮ちることによってこの世界全体の墮ちた状態に目を開かれる。既に名前を挙げたホーソンの多くの人物達も、多かれ少なかれ自分の罪や苦悩を通して個人を越えた世界の暗い部分に目を開かれる。しかしハリーの(ということは他の詩作品などから考えても、それはエリオットの、と云ってよいだろう)そういう認識とホーソンの人物達の(これも即ちホーソンの、という見方に私は立ちたい)それとの間には差がある。一言で云えば前者の方が徹底している。

ハリーには自己の罪と苦悩を通して認識するに至ったこの世界の墮ちた状態というものがこの世界のまごうかたなき現実なのだという確信がある。彼はそういう意味で真理の認識者なのであって、他の登場人物、エイミー、アイヴィー、チャールズ等の「何事も起ったことのない」普通の人間と対立している。

……君達は／僕が幻影で苦しんでいると信じておいでに違いない。病んでいるのは／僕の良心ではない、僕の心ではない。僕が住まねばならないこの世界なのだ (p.67)

だから彼は正常な世界からの例外的な「逸脱者」などではないのだ。以上とほとんど同じことをもっと強く云っているハリーの長い科白をここでは大意だけ書き下してみよう。

「君達はあらゆる事柄をバラバラに考えようとするので、結局あらゆる事柄が重要でないもの、君達のいう人生の正常なコースからの小さな逸脱といったものになってしまう。君達が正常と呼ぶもの、それは非現実だ。僕自身、自分の人生を孤立した破滅、秩序ある世界の中のちょっとした荒廃と考えていた時もあったが、今ではそれが全人類と世界の、僕の手にはおえぬ何かとてつもない災厄、何か恐るべき誤ちと逸脱の正当な一部というふうに思われ始めているのだ。」

「時の関節が外れている。おお、それを正すべく生れ合せるとは！」と嘆息したのはハムレットだったが、現代人のハリーには「それを正すことは自分の手におえぬ」ことが余りにもはっきりわかっている。

さて、ホーソーンの世界にはこのハリーのような「我と世界共に墮ちたり。我のみその真理を知る」といったような認識者は登場しない。(エリオットが後にハリーを“Prig”だとしてけなしただのもこのような「エリート的罪人」に嫌気がさすか照れたかしたのに違いないがそれも尤もと思われる。) ホーソーンの罪人や苦悩者達が、そうでない一般の人間達よりもより深く人間とこの世界のリアリティに迫るといえるのは、この世界の罪と苦悩の暗い部分に目覚め、より深くそれを理解し、それとの共感に参入することが出来るということである。ホーソーンにとって世界には、また人間の心には、暗い部分があって、しかもそれは決して「孤立した」小さな部分なのではないが、やはりそれは部分であって全体ではない。部分の墮落が直ちに現実の世界全体の絶望的な状態を意味しはしない。

では「病んでいるのは世界だ」というのがハリーの、そしてエリオットの拠りどころだとすれば、それに対応するようなホーソーンの拠りどころは一体何なのか。それが彼のいわゆる“the magnetic chain of humanity” (『イーサン・ブランド』)、或は“the whole sympathetic chain of human nature” (『七破風の家』)、即ち「全人類を同朋として結びつけるきずな」への信頼である。これは、20世紀の詩人エリオットにはもう失われてしまっている素朴な意味でのヒューマニティへの信頼がホーソーンにはまだあるということだ。それはエマーソンなどの熱烈でオプティミスティクなヒューマニズムとは違って「原罪」の結果をうけてはいるが、にも拘らずそれ自体の中に価値あり善であるものを含み人間の救いとなりうべきものを含んでいる。それはホーソーンにとって現実的なあれこれの社会の中に存在していたものではなかった(『緋文字』のピューリタン社会にも、『プライズデイル・ロマンス』のトランセンデンタリスト達の試みた理想社会にもそれは実現されてはいない)が、しかし少なくともそれは“illusion”ではないある実体であった。もしそれが無かったら彼の拠りどころが何もなくなくなるわけだから(彼にとって神はそれ程現実的な手応えのあるものではない)、それがなければならぬというのはホーソーンの願いでもあったのだ。

たとえイデアに近いものであるとしても善にして価値ある“magnetic chain of humanity”というものが存在する以上、ホーソーンの世界の罪人はそれからの「逸脱者」であることになる。対比

の為にやや単純化していえばホーソーンの罪人は、つまるところ、ハリーが「俺はそうじゃないんだ」と主張したところの、「人生の正常なコース」からの「逸脱者」,「秩序ある世界」における「孤立した破滅」であるのだ。ホーソーンは「ウェイクフィールド」という短篇で、「一見わけのわからぬ混乱に陥っているけれども、個人は組織に、組織はまた他の組織に、そして全体にというぐあいによく適合しあっている我々の世界」からうっかり逸脱してしまった男のことを描き、その男のことをまさしく“the Outcast of the Universe”と呼んだ。

さて、以上のところから「救い」というものがエリオットとホーソーンで各々どのような形をとるかが必然的に決まってくるのが理解されよう。自分を含めて世界全体が墮ちた状態だという認識をもつハリーにとって、この世界のうちでの救いはありえない。何らかの絶対者、超越者へと志向する宗教的救い以外にはありえない。彼は真の意味での“conversion”を経てこの世とは次元を異にする新しい秩序の中へ入ってゆかねばならない。そういうハリーに関してアガサは云う。

ここを出れば確かに苦悩と自己放棄の世界です。／しかしそこに誕生と生命があるのです。ハリーは境界を越えたのです。／そこから向うでは安全と危険とはことは違った意味もっています。／彼はもう戻れないのです。(p.114) (傍点筆者)

『カクテル・パーティ』のシリアもこれと全く同じ性質の「越境」をしてゆく。

ハリーやシリアの救いがこのように日常的人間世界からの戻れない「出発」という形をとるのに対して、ホーソーンの罪人達の救いは逆に一種の「復帰」という形をとる。彼等の罪、彼等の誤ちが「人類を結びつけるきずな」からの逸脱であるからには彼等の救いはそれへの復帰にある道理である。そしてその「きずな」は日常的人間性の次元内にあるものだ。それへの復帰の為にはハリーの場合のような世俗的自己の完全な放棄は必要ではない。要求されるのは彼等の「逸脱」の主な原因たる知的傲慢の放棄と同朋たる人間への愛の回復である。その代りホーソーンにおける救いには、エリオットにおける救いが保証されている完全な上昇はいささかも保証されていない。恐らく一番問題とされる『緋文字』の牧師ディムズデイルの最後の救いの問題もこの観点から考えてみてはじめて理解される。さらし台の上で衆人の目の前で息絶えんとする牧師にヘスターが「私達はこのすべての悲しみによってお互いの罪をあがない合ったのですから、天国において一緒に永遠の生をうけることは出来ないでしょうか」と尋ねるが、それに対する牧師の臨終の言葉は次のようである。

「お黙りなさい、ヘスター。我々の破った掟、今明らかにされたこの罪、それだけを考えていなさい。あなたの云うようなことはないだろう。私は恐れる。我々が神を忘れてお互いの魂への尊敬を踏みにじった時、それから後は永遠の純粋な生のうちに二人が再会することを望んでも無駄だったのではないか。神のみ御存知だ。神は恵み深い！ 神はとりわけ私の苦悩に於て恵みを示

し給うた。私の胸に焼ける責苦をお与えになることによって、あの恐ろしい邪悪な老人（チリングワース）を私のもとに送り、責苦がいつも真赤に燃え続けるようにして下さることによって。また、今私をここに導き人々の前で勝利の恥辱にみちた死を選ばせて下さることによって！ もしこれらの苦悩の中どれかが欠けていたら私は永久に滅びてしまっていたらろう。神の御名の讃えられんことを！ 御旨の行われんことを！ さようなら！」（2, 3章）

ディムズデイルが罪を隠して生きていた、いわば二重の罪を負って生きていたということは彼が「人間性のきずな」から決定的にはずれて生きていたということであり、この最後の場面での衆人の前での罪の告白は彼をその「きずな」に復帰させる。彼の神の恵みへの賛美はその復帰へと神が自分を導いてくれたことへの感謝であって、それを越えた超自然的な至福への何らの確かな予感がそこにある訳ではない。その他『ブライズデイル・ロマンス』のホリングズワース、『大理石の牧神像』のドナテロやミリアム等贖罪の道を歩むホーソーンの罪人達の前途も決して浄化的な光明に照されることはない。ホーソンにはエリオットの「バラ園」のヴィジョンは無い。彼がそういうものを与えなかったというのはしかし彼の文学の欠点を意味しはしない。彼の「救い」が「人間のきずなへの復帰」という基本的性格をもつ以上、ヒューマニティの次元を越えた至福のヴィジョンは無縁であるのが当然で、彼が滑稽な無理をしてそんなものに手をふれなかったということはむしろリアリストとしての長所なのだ。エリオットがホーソンを「厳しい冷たさをもった、人間のモーラル・ライフの真の観察者」だと評したのはそういう意味においてであったらう。

さて以上のところからの当然の帰結だが、エリオットのハリー（及びシーリア）とホーソーンの罪人達との間にもう一つ重要な相違が現れる。ハリーが“conversion”を経て新しい世界へ出発してゆく時、彼は単に一個の“convert”である上に、自らと他者の為に苦難を受けるという殉教者的性格をおびてくる。アガサは云う。

……多分／あなたはこの不幸な家族の意識なのです。／家族のために浄化の炎の中に放ち送られた鳥なのです。／きっとそうだ。あなたはその後／唯一人氷の炎の中をさまよいつけるでしょう。／私達がかつて苦しんでいる呪縛を解く為に選ばれたものとして。（p. 105）

自分の罪と苦悩が自分一個のものでなく、墮ちた世界全体の一部なのだという自覚をもつ人間が、自己の救いを同時に他者の救いともするような方向に志向するというのは自然のなりゆきと云えよう。一方ホーソーンの世界にはそういった殉教者的人間が登場しないというのも当然だ。つまるところ一個の「逸脱者」である罪人がどうして他者の救いという任を負うことが出来よう。ホーソーンの世界での救い手となりうるのは『七破風の家』のフィービーがその典型であるところの純心と愛の少女達で、彼女等は「逸脱者」達の手をひいて「人間のきずな」へ導き戻す役割を果

す。プリシラ（『ブライズデイル・ロマンス』）は贖罪の半生を送るホリングズワースの伴侶となり、フィービーとヒルダ（『大理石の牧神像』）はそれぞれ、自分がわき道へそれてゆくのではないかという危険性を自覚している青年ホルグレイヴとケニヨンの求めに応じて結婚し彼等をその危険から守ることになる。ハリーを日常性の埒外へ導いてゆくアガサのような女は、ハリーの母親エイミーのような最も世俗的日常的な人物の目から見れば危険極まりない女であるが、ホーソンのフィービー達はそんな危険性はいささかも有しないどころか安全お守りみたいなものである。（ホーソンの四つの長篇の中、この種の女性が出てこないのは『緋文字』だけだがこの作品のすさまじさはその辺にも理由がある。）但し彼女らは最初はその余りの純心、単純さの故に、原罪を内に含むところの「人間性のきずな」に最も深い意味においてつながっているとは云えないのだが、この世の罪や苦悩に何らかの形で触れることを通して「きずな」により深くつながり、罪人の現実をより深く理解することが出来るようになるのだ。いわば罪人達が下から「きずな」に復帰してゆく（或はしない）のに対して彼女達は上から初めてそれに参入してゆくということになる。神を一応外におくホーソンのヒューマニティの世界はそういう構造をもっている。

#### お わ り に

エリオットとホーソンの間という、手応えの確かな足場というものがまるで乏しい大きな問題にとりついたこの論稿に、この上何かの「結論」をつけ加える準備は実のところないのだが、形だけのしめくりをつけさせて頂くとすれば、エリオットの「わが終りにわが始めあり」にならって、わが「はじめ」に戻ることにしたい。

エリオットは例のジェイムズ論の中でホーソンとジェイムズ関係にふれ、両者の関係は作品の表面に表れる直接的な影響関係といったものよりもっと内面的な“personal kinship”といったものにあると云い、ジェイムズをホーソンと同じような“continuator of the New England genius”であると云った。私は今その二つの評言をそっくりそのままエリオット自身に冠せたい誘惑にかられる。そしてその冠はジェイムズ以上にしっかりとエリオットの頭にかぶさるのではないかとさえ思う。私は（下）で概観した両者の相違というものを無視する訳ではない。だがあの相違というのはつまりホーソンの持した非宗教的（“non-religious”）態度とエリオットの取った宗教的態度の相違から出てくるものであり、しかも一方がピューリタニズムの伝統内にありながらそれに自らをコミットしなかったのに対して、他方がカトリシズムにコミットしたというその宗教的態度の相違も、両者の異質性を証するというものではなくてむしろ同質性を証するものであるのかも知れないのだ。19世紀中頃のニュー・イングランドに生きたホーソンと精神的親近性を分つ作家が20世紀という時代に生きる時、彼は少くとも一つの選択として一人のエリオットにならざるを得ないのではないだろうか。ホーソンの二人の娘がカトリックとなり、その一人は立派な修道女として活動したという事実は直接関係のない事としてこの場合おくとしても。

((下)了。)

付記

本小論はアメリカに於ける“new literary history”を記述するという作業のかぶら矢である。この作業に関わって鈴木と日夏は『アメリカに於ける贖い』(*Carved in Sand*) (PLAZA Universaires, 1996)を過去上梓している。又ヘンリー・ジェームズが『ある貴婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*, 1881)を執筆した際、その影響下にあったとする(F. R. Leavis『偉大な伝統』(*The Great Tradition*, 1948) ジョージ・エリオットの『ダニエル・デロンダ』(*Daniel Deronda*, 1876)に関して二人は『ジョージ・エリオット「ダニエル・デロンダ」鑑賞』(P. U. T. S. (PLAZA Universaires Texts and Studies), 1997)を発刊している。これも“new literary history”を確立すべく記録したものであるが参考までに記しておく。